

動かして、ぜひとも調査を行わなければならないだろう。これは研究者である我々の責任である。

この国の宗教文化が、情報も含めて周知される機会を失いながら、ステレオタイプ化されバラエティ化していくことに大きな危惧を感じざるをえない。

注

- (1) 読売新聞一九五三年八月二八日。
- (2) 『昭和二十日の全記録 第一〇巻テレビ時代の幕開け 昭和二十八年—三〇年』(講談社、一九九〇年、四五頁)。
- (3) 『週刊東京』一九五七年二月二日号。
- (4) 阿部美哉の研究としては『宗教運動と宗教学におけるメディアの機能』(『宗教文化の諸相 竹中信常博士頌寿記念論文集』山喜房仏書林、一九八四年)、『メディアと宗教運動—コミュニケーション形式と宗教の志向性を考える』(『愛知学院大学文学部紀要』一九九号、一九八九年)など。筆者の研究としては「アメリカ

カにおける宗教テレビの現状」(『宗教研究』二六九号、一九八一年)、「日本宗教の情報化の現状—高度情報化社会における個人化と宗教」(『東洋洋学術研究』二八巻三号、一九八九年)、「情報化と宗教」(島蘭進・石井研士編『消費される宗教』春秋社、一九九六年)など。

- (5) リップマン『世論』(掛川トミ子訳、岩波文庫、一九八七年)。
- (6) 『社会学辞典』(弘文堂、一九八八年)。
- (7) 相良順子「子どもの外国イメージとメディア」萩原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ—メディア・ステレオタイプ研究』勁草書房、二〇〇四年。
- (8) 詳しくは「ステレオタイプ化される宗教」(『國學院大學日本文化研究所紀要』二〇〇八年)参照。なお、北朝鮮に関する放送時間は不明。
- (9) 同。
- (10) 石井研士『増補改訂版 データブック現代日本人の宗教』(新曜社、二〇〇七年)参照。

特集 メディアが生み出す神々

宗教とメディア報道

UFOや占い、超能力など、科学で解明できない現象を総称して不思議現象と呼ぶ。UFOを宗教的権威と関連づけるUFOカルトのように、それ自体が教団を形成して体系化していくものもあるが、日本人に特徴的な「無宗教の宗教性」に合致した形で、特定宗教の形をとらない不思議現象もまた、人為を越えた存在を信奉する「宗教」の範疇といえるであろう。本稿では、「宗教」の範囲を広くとらえ、メディア報道との関連を見ていきたい。

なお、情報の送り手としてメディア媒体そのものを指す場合は「マス・メディア」、社会的影響過程や受け手に与える効果までを含んだ概念を指す場合には「マス・コミュニケーション」の表現を用いて区別することとする。

る。

一 メディアと「宗教」の始まり⁽¹⁾

日本における不思議現象(「宗教」)のブームには、古くは一九一〇年の御船千鶴子による千里眼事件や長尾郁子による透視実験などがあるが、一九四〇年代後半のアメリカにおけるUFO目撃談からさまざまに拡大し、ユリ・ゲラーのスプーン曲げなどによって、一九七三年に突出したブームが沸き起こった。

日本で不思議現象に関するテレビ番組が登場したのも、同時期である。これらの番組には、第一に雪男や山の半獣人、ツチノコなどの「探しもの」、第二にUFOやパミュード・トライアングル、心霊写真、心霊現象などの

こしろ えいこ

小城英子

「不思議現象もの」、第三にスプーン曲げ、占い、霊視、心霊手術などの「超能力もの」の三つのジャンルがある。大半は捏造といわれており、捏造やトリックが発覚したものは枚挙に暇がない。

放送倫理と「宗教」

放送法には「報道は事実を曲げないですること」、「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」、民放連放送基準解説書には、「宗教を取り上げる際は、客観的事実を無視したり、科学を否定する内容にならないよう留意する」、「心霊術や、いわゆる念力などは、科学で説明できない超自然的な一種の精神現象と言われ、これも危険を伴いやすいので、番組制作にあたっては、安易な模倣を助長しないように注意する」などの記述がある。不思議現象を扱ったテレビ番組の大半は、捏造と安易な不思議現象肯定の点で、放送倫理に抵触しているという指摘もある。⁽²⁾しかし、バラエティ番組は真実性が求められる報道番組ではないこと、不思議現象の存在そのものを法的に裁

くことはできないため、法的規制を受けにくく、したがって人権侵害や詐欺被害などの具体的な被害が発生したケースでなければ問題視されないことなどから、放送倫理への抵触が取り沙汰されるほどの不祥事は起こりにくい。不祥事が発生した場合は、当該番組を即刻打ち切りにしたり、当該人物を降板させたりするという枝葉末節の対処で事態が收拾されてしまうため、不思議現象が好まれる体質は維持され、類似番組が繰り返されてきたと考えられる。

不思議現象番組が登場した一九七〇年代初は、朝日新聞を中心として、多くの批判がなされたものの、結局、受け手を含めた世論全体が、捏造であることが判明しても黙認したことが大義名分となつて、放送倫理への抵触が公然と容認され、不思議現象番組は高い視聴率に支えられて、さまざまなブームを牽引してきた。

二 オウム・ショックとメディア環境の変化

一九九五年のオウム事件の影響で、破壊的カルトにつながりやすい不思議現象の番組は一斉に自粛され、占い

や超能力を扱う霊能者のタレントもマス・メディアから姿を消した。

一九九五年は、オウム事件が発生しただけでなく、メディアと「宗教」を考える上でターニングポイントとなっている年である。同年、エイリアンの死体を解剖する場面を映したとされる「宇宙人解剖フィルム」が公開されたが、実証の術のない、言説の中でこそ存在し得た宇宙人が具体的な映像として表現され、また、その死滅の場面を描かれたことよつて宇宙人神話そのものも消滅させられることとなり、以後のUFO神話を変えたといわれている。⁽³⁾

また、現在の巨大なメディア環境へとつながる、携帯電話やパソコン通信などのニューメディアが、阪神・淡路大震災を機に一気に普及に転じたのも、同じく一九九五年である。人々の志向性やコミュニケーション・ネットワークが、一九九五年を境として、量的にも質的にも異なっていることに留意する必要がある。

オウム事件後、メディアと「宗教」には、以下の四つの波が派生したと考えられる。第一に霊性を別の形に置

き換えて存続させたスピリチュアリティの台頭、第二にエンターテイメント性の強調、第三に霊的なものを一切否定する科学信仰、第四に科学のコンテクストに乗せられた健康ブームである。

スピリチュアリティの台頭

日本人は、仏教やキリスト教などの特定宗教に帰依する割合は少ないものの、特定宗教の枠組みではない超越的な存在を信奉し、漠然とした霊的なものを信仰する傾向は強く、「無宗教の宗教性」に特徴がある。一九九五年のオウム事件後、二〇〇〇年までは反カルト一色であったが、人々の霊に対する関心は強く、二〇〇〇年以降は破壊的カルトや特定宗教との結びつきを希薄化させた形で再び霊信仰が取り上げられるようになった。

再登場した霊信仰の特徴は、「幽霊」や「靈感商法」などのネガティブなイメージを想起させる漢字表記の「霊」ではなく、カタカナ表記の「スピリチュアル／スピリチュアリティ」のキーワードを用いていること、折しも到来した「癒し」や「カウンセリング」のブームと